



中条唯七郎著/中村芙美子訳/青木美智男校註『善光寺大地震を生き抜く現代語訳』弘化四年・善光寺地震大変録』』

著者	早坂 昌英
雑誌名	国史談話会雑誌
巻	53
ページ	127-129
発行年	2012-12-21
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127078

〈紹介〉

中条唯七郎著／中村美美子訳／青木美智男校註

『善光寺大地震を生き抜く 現代語訳『弘化四年・善光寺地震大変録』』

早坂昌英

本書は、信州埴科郡森村（現在の長野県千曲市森）の中条唯七郎が善光寺大地震についての経験を記録した「徒然日記 附地震大変録」を翻刻し、現代語訳を付したものである。

善光寺大地震は弘化四（一八四七）年三月二四日午後一〇時ごろに信州善光寺平（現在の長野県長野市）を震源に起こったマグニチュード七・四の直下型地震である。多数の家屋崩壊や火災、山崩れによる土砂ダムの決壊など「真正正銘の地獄でさえこれに及ぶだろうか」（四月一四日）と思われるほどの被害をもたらし、地震発生から終息まで七年の歳月を要した。その規模は、江戸時代の大火・地震・洪水、そして津波についての番付である「聖代要廻磐寿恵」において「関脇 弘化四 信州大地震」と記され、近世において二番目に

巨大な地震とみなされていた（現在の地震規模測定の基準であるマグニチュードで順位を考えると四番目）。領主の松代藩主真田幸貫をはじめ多くの人々が記録に残している。

記録者である唯七郎は安永二（一七七三）年に中条家の長男として生まれた。幼くして両親と死別し、祖父母と叔父に当たる本家中条八郎左衛門の養育を受けた。少年期に村内の医師から手習いを受け、寛政一二（一八〇〇）年に分家独立して農業に専心した。しかし、本家が経営破綻に見舞われると、唯七郎は本家を相続し、その再興に奮闘努力した。本家再興に光が見えだした文政九（一八二六）年からの三年間、森村の名主に選ばれ、村政にも大きな力を発揮した。その後、善光寺大地震を七五歳で経験し、嘉永二（一八四九）年八月五日に七七歳で没した。唯七郎は記録に熱心でもあった。書き残した「本家日記」と題する日記は九三冊存在し、それをもとに村内外での見聞を「見聞集録」としてまとめている。「見聞集録」は柄木田文明氏により全文翻刻され『成蹊論叢』三三（一九九四年発行）、法政大学の学生により全文現代語訳されている（『近世信州庶民生活誌——信州杏の里名主の見たこと聞いたこと』ゆまに書房、二〇〇八年）。「徒然日記 附地震大変録」は、「見聞集録」の編集集中に地震に遭遇した唯七郎が記した地震を中心とした日記である。

唯七郎が住んだ森村は、松代藩真田家の支配下にあり、埴

科郡三二ヶ村の中では村高約一三〇〇石を有し、隣村の雨宮村や矢代村（ともに千曲市内）に次ぐ大きな村だった。森村は、千曲川と犀川を隔てた南方に位置する。住民は地震発生の前年弘化三年には、戸数三一軒、人口一四四〇人（男七〇一人、女七三九人）という構成で、村民の大半が本百姓で農業中心の村であった。唯七郎が生きた文化・文政期ころから養蚕業がさかんになり、村人の多くはそれを副業とし、養蚕業は村人の大きな収入源となっていた。

以上を踏まえたうえで本書の内容について説明することにした。本書の構成は以下の通りである。

東日本大震災復興への一つの提言（青木美智男）

『弘化四年・善光寺地震大変録』を読まれる前に

——絶え間なき余震を生き抜く民の記録（青木美智男）

弘化四年・善光寺地震大変録（現代語・中村美美子訳）

大地震の発生・前代未聞の大災害（三月二十四日）晦

日）

絶え間なく続く大地震（四月一日）十二日）

犀川堰止め湖の決壊（四月十三日）二十九日）

余震を耐え抜く毎日（五月一日）二十九日）

豊作が唯一の救い（六月一日）七月晦日）

地震が水脈を変化させた（八月一日）九月晦日）

余震は漸減（十月一日）十一月二十九日）

地震を生き抜いたこの年（十二月一日）十五日）

徒然日記 附 地震大変録（原文）

本書刊行の経緯と協力者の方々（青木美智男）

「東日本大震災復興への一つの提言」では、まず本書の校註者である青木美智男氏自身の東日本大震災の体験が語られている。そして現在までの歴史学研究には、過去の地震に遡り、その発生から終息に至る余震を含めた長いスパンの分析が不足していたという問題点を指摘する。

本書で紹介する『大変録』には、地震発生時のみではなく、余震も含めたその後の生活についても詳細な記録が記してある。それを分析・活用することで先に挙げた問題点を克服し、今後の地震研究や被災者のメンタルケアの参考にするこ

とができるはずだと、青木氏は評価する。

善光寺大地震は『長野県史』通史編（一九八九年発行）にも取り上げられてきた。しかし、そこで紹介されている史料は松代藩家老河原綱徳の『むしくら日記』が主であり、藩側の地震認識の面が強い。一方、『大変録』は農民の側からの善光寺大地震を描いている。そのため、家屋崩壊や火災・土砂ダムの決壊など大きな被害のほかに、農繁期に行われた復興のための人足要請に対する思いや、水脈の変化による農業

への影響など、農民ならではの記述が見られ、生活記録としてとても興味深い。

本書は東日本大震災を経験して地震に対する関心を強めている人々に対しても、江戸時代人の地震に対する心性に迫る上で最適な書であろう。今後、災害史研究が進められていく上で、広く読まれることを期待したい。

（日本経済評論社、二〇一一年一月刊行、三六六頁、本体四八〇〇＋税円）